

都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー (1) ダリマ

サラングレル

児玉香菜子

本テキスト¹は中国内モンゴル自治区シリングル盟シュローン・フフ² (正藍) 旗³出身、現在内モンゴル自治区フフホト市在住のダリマさんのオーラルヒストリーである (写真)。



写真 ダリマさん (2018年11月撮影)

ダリマさんは巳年で、取材した時は1929年生まれの86歳(2014年)だった。80代の高齢とはいえ、考えがはっきりしており、健康で、清潔で、快活であった。おそらく60過ぎといわれても誰も疑わないだろう。それほど若い容顔である。ダリマさんの生まれ故郷はシリングル盟シュローン・フフ旗である。

ダリマさんと初めてお会いした時、映画で見ていた上の世代の知識人を思い出した。80過ぎとは信じられないくらい健康で、すらりとして美しく、白い眼鏡をかけた清潔な老人が満面の笑みで迎えてくれた。挨拶をし、おしゃべりをし、お茶とご飯をいただく間に、ダリマさんが考えていたよりず

¹ 本テキストはサラングレルにより採録されたものである。言語はモンゴル語である。採録されたものをサラングレルがモンゴル文字に書き起こし、それを児玉とサラングレルが翻訳した。

² 本テキストのモンゴル語表記はチャハル方言に準じる。

³ 内モンゴル自治区行政区の名。中国の県に相当する。

っと高い教養のある知識人であることが知れた。枕元には新聞、雑誌、本が積み上げられ、それらについて1つ1つ解説してくださった。ダリマさんはモンゴル語と漢語の外に、日本語ができる。さらに、驚かせたのはこのように高齢であるにもかかわらず、チャハル・モンゴル人の伝統的な髪飾りの手工芸を続けていたことである。さまざまな色のサンゴ、真珠、瑪瑙などを色とりどりにつなぎ合わせて巧みに作る技術、視力のよさに心から敬服した。もし自分の眼で見えていなければ、ダリマさんが巧みに作った飾りの数々を80過ぎの女性が作ったとは到底信じられないだろう。このたびの取材の意義はこれだけではない。

—自分の仕事、生活史を話していただけますか。祖父母、父母、きょうだい、親戚についてでかまいません。自由に話してください。

何を話しましょう。祖父は旗に仕事のある人でした。父にはきょうだいが10数人いたそうです。しかし、祖父の家では息子だけ死んでしまっていたそうです。そのため、父を私の祖母の妹である大叔母に養子に出し、13歳になる時、家に再び連れて来たそうです。当時、私の父は大叔母の家から嫁に行くかのように泣きながら戻って来たそうです。後も、その大叔母と本当に良い関係で親しくしていました。私たちが幼い時、私たちの家が火事になったそうです。母が病気のため、父はその大叔母の家のそばに移ったそうです。

母が亡くなった年を数えると、1933年の夏でしょう。私はよく覚えていません。ある朝だったでしょうか。曇り空で、少し雨が降っていました。私の祖母の妹、オムバおばあさん（父方の祖母の妹。この大叔母を私たちはオムバと呼んでいた）は姉と私の2人を慌てて呼んで、大人が着る古いぼろぼろの服を着せて、子ウシの放牧に行かせました。姉のセリマーは8歳だったので、かなり物事が分かるようになっていて、何か悪いことが起きたことに気が付いたようで、暗い顔で、小さな胸に収まりきれない悲しみを抑えきれずにしゃくりあげて泣いていました。私たち2人は家の北側のかなり遠くにいて、デレス⁴のあるところで子ウシを放牧していました。私は姉に

「誰がお姉さんをたたいて叱ったの？」

と聞いても、姉は何も言わずに泣いていて、正午に家に帰ってきました。

私たちが放牧に行く時に、母はオムバの固定家屋のそと部屋⁵の木製ベッドに横たわっていました。

しかし、私たち2人が帰ってきて見ると、母はいませんでした。私はとても焦って、

「お母さんは？」

と泣いて、

⁴ イネ科。学名は *Achnatherum splendens* (Trin.) Nevski, 漢語名は芨芨草、和名はラクダガヤ。同定は内蒙古植物誌編輯委員会（1994：206, 208, 209）、米倉浩司・梶田忠（2003-）による。

⁵ 家屋に2部屋あり、名称はそと部屋とうち部屋。

「お母さんはどこに行ったの。」

と聞くと、オンバおばあさんは

「お母さんは寺院にお参りに行きましたよ。病気がよくなったら帰ってきますよ。」

と、いろいろと良い言葉で慰めました。その後、1、2日、12日、何か月待っても母はずっと帰ってきませんでした。ただ、いつも夢で母と会うだけでした。20歳になるまで、母を見つけて喜ぶ夢を見るか、逆に、見つからずいつも困り果てている夢を見ていました。

私の父はとても頭がよく、能力がある偉大な人でした。両親には姉と私の2人の娘がいました。父は33歳という最も若い時に母を亡くし、姉と私たち2人は幼い時に母を亡くし孤児になりました。私が5歳の時に、母は病死したそうです。父は2人の娘を愛し、他の人と再婚しませんでした。私の母の死後、生涯独身で、私たち2人を育てました。「継母の手に2人の娘を渡し苦しんだらどうしようかと考えていた」と話していました。本当に父は2人の娘を命のように愛して育てました。

父の家庭教育はとても厳しかったです。幼い時、外に遊びに行くことを厳しく禁止します。娘がそんなに遠くに行つてはいけないと厳しくしつめます。私が覚えているのは、家には少しの家畜しかありませんでした。そのため、生活が厳しかったのでしょう。父はウジウムチンから塩を運ぶためにウジウムチンに行きます。塩を運ぶことでとても疲れていたでしょう。父は塩を運んできてからは家事をせず、家で本を読みます。たくさんの本を読んでいました。私が覚えているのでは『モロム・トイン伝記』という本です。他にどんな本があったのでしょうか。それらの本を読んでいました。父は文字を知る知識人でした。当時、旗長官の書記をしていました。おそらく1930数年のことでしょう。当時、旗には4人の書記がいて、順番に旗役所⁶に行き、勤務していました。父はその4人のうちの1人で、交替で旗長官の書記として旗役所に行っていました。父の名前はシリムといたので、人びとは「シー・タガラハ（書記）」と呼んでいました。おそらく私が8、9歳の時に日本軍がやって来ました。

1941年の夏でしょうか。以前、タイプス（太仆寺）右翼旗と言っていた、現在シュローン・フフ旗ジャンディーン・ゴル村のマロルトイーン寺院で大きな祭りがありました。たくさんの人たちが角笛やチャルメラを吹き、チャム⁷を踊り、読経し、祭祀、読経をし、とても多くの人たちが集まり、にぎやかでした。金持ちや貴族、ラマ、平民、軍人などいろいろな人たちがきれいな服を着て、最も美しく、値が高い飾りをつけて、集まっています。その中で最も私の注意を引いて、感激させたのは、張北青年学校⁸の女子クラスの学生たちでした。私は心からうらやましく思い、片時も離さず目で追いかけていて、その時「私は必ずこの学校に入って、彼女たちと同じ学生になろう」という考えがう

⁶ 王府。旗長の住まいが役所を兼ねていた。

⁷ チベット仏教における仮面舞修会（木村2007：3）。

⁸ チャハル青年学校（森沢1994：154）。

まれました。女子クラスの子どもたちがみんな同じ服を着てかわいらしく列を作って来るのを見て、私はとてもうらやましく、姉と2人で彼女たちの後についていき、誰かと会って、その学校に入ることに絶対についていこうと思いましたが、勇気がなく帰ってきました。彼女らの中に、私の親戚の子どもがいることに気が付きましたが、声をかける勇気がありませんでした。そうして、「必ずその女学校に行こう」と決心しました。先生は格好の良いヨーロッパの服を着た背の高い若者で、彼女らを並ばせて、祭りの場所に連れてきて、モンゴル語と日本語の歌を歌わせました。本当に素晴らしかったです。

そして、私はその学校に行く希望を父に伝えると、父は「いいです。行っていいです。だから、よく勉強しなさい。」と私を励ましてくれました。もともと、父は近所の子どもたちにモンゴル文字を教える先生でした。それで、私はその機会に字を学び覚え、本を少し読んでいました。翌年の春、父は私を張北青年学校に進学させました。旗役所から私を学校に入学させる通知がきました。自分の希望が叶って、地面に足がつかないほど喜びましたよ。父がどんなに頑張って学校の入学通知書を手に入れたのかを今考えると、胸が痛みます。私を学校に行かせる時、父は新しい服と靴を買ってくれました。モンゴル服の帯まで新品です。生活が苦しかったのに、父が世間で恥をかかないようにとどんな苦勞をしてそれらの新しい服を探して用意したのかと考えれば考えるほど、私は父に感謝しきれません。当時、私が学校に行くことになったことについて、隣近所や親戚の人たちは家にやって来て、「私をそんなに遠い所に行かせてどうするのか」と父を非難していました。私は当時とても痩せて小さかったです。そのため、私を本当にかわいそうと思った人もいたでしょう。しかし、『女はハーン（皇帝）になれない。ロバは象になれない。』というよ。女の子に文字を教えて、どんな役に立つのか」と古い思想から忠告してやめさせようという人もいました。父は本当に先々まで見通しのある人でした。誰が何と言って忠告しようとも気にせず、私を牛車で旗役所に送って旅立たせました。旗役所には張北青年学校に行くヤンジンハム、ウルジツォーなどの子どもたちがいて、父は私を彼女らに紹介して託し、一緒に行くことになりました。私をそこに送って帰途に着く時、父が目には涙をためていたのを今でも目に浮かぶように思い出します。

—当時、学費は高かったですか。どのようでしたか。

その学校は学費を取らない上に、飲食、服装、敷布団と掛布団のすべてを支給します。そのため、貧しい家庭の子どもたちもそこで文字を学ぶ良い機会になりました。私はその学校に4年通いました。本当に忘れることがない素晴らしい機会でしたよ。初めてその学校に到着した時、どんなに素晴らしかったか思い出します。私たち何人かは旗役所から丸一日トラックに乗って行き、日が沈んで暗くなり始めた時に張北青年学校に着きました。疲れただろうと、学校の食堂に案内して、真っ白のマン

トウ、豚肉の入ったスープという美味しい食事を私たちに食べさせてくれました。本当にすべてが素晴らしいかったです。一般に、家ではツァガン・サル⁹にだけ食べる食事です。その学校の素晴らしい生活を私は本当に生涯忘れることができません。孤児の貧しい普通の牧畜民の質素な子どもであった私がそのような素晴らしい学校に入り学ぶということがどんなに幸福で喜ばしいことであったかを私は言葉では言い表せません。

—その学校の宿舎はどのような条件でしたか。1部屋に何人で住んでいましたか。

宿舎の条件はとても良かったです。新しい白い部屋で広く明るく、電灯があるので昼夜関係なく明るいです。油灯を使う私たち田舎の家とは比べられないくらい明るかったです。宿舎は部屋ごとに花の名前が付いていました。私の宿舎の部屋は梅の花、日本語で「ウメ」と言いました。私ははじめ日本語が分からなかったのが、宿舎の名前の意味が分かりませんでした。私たちの宿舎の部屋は皆「サクラ」「アヤメ」「ウメ」というように日本語の名前が付いていました。1部屋に10余人が暮らします。部屋は広く、木製の長いベッドがあります。ベッド、布団すべてを学校が準備してくれます。同じ制服を与えてくれます。日本式の制服、普段着るシャツとスカートを学校がくれます。また、顔と手を洗うタオル、石鹸からはじまって生活に使うさまざまなものを整えて与えてくれます。私たちからお金を徴収しません。4年間の学校生活は私の生涯で最も幸せで、意義のある、忘れられない時代です。その4年間、私は多くの素晴らしい先生たちから多くの知識を学びました。その4年間で学んだ知識は私の生涯の仕事と生活の基礎となりました。

—通っていた張北青年学校をだれが設立しましたか。日本でしたか。

当時私たちは学校をだれが設立したのかということを知りませんでした。しかし、徳王がたびたび私たちの学校に来て、講演していたのを覚えています。大変学問のある人でした。とても素晴らしい講演をして、私たちを励ましました。徳王が教育をとっても重要視し、民族の文化教育を大変大事にしていたのは明らかです。黒い乗用車で来ていたものです。青い絹のモンゴル服と黒絹のチョッキを着て、黒い房の付いた、編んだ黒い辮髪を背にたらし、おわんの形をした黒絹の帽子をかぶり、太った中背で、白く丸い顔をし、活力のある人でした。当時、おそらく30代だったでしょう。徳王が来るとなると、大変な騒ぎになり、張北市の全役人たち、軍人、生徒たちが道の両側に並んで、何時間も待って出迎えていました。当時、徳王はその地域にとって、そんなに尊敬される重要な人だったのだなと私は思うものです。徳王の息子は学校の先生をしていました。当時、バロンスニト（蘇尼特右）旗の女学校の校長でした。徳王は私たちの学校に来るたびに講演し、多くのことを話していました。

⁹ 旧暦の1月。この場合は正月の意。

「民族の言葉と文字をよく学べば、社会のあらゆる事業に参加できます。少なくとも学識を身に付ければ、家族をよくすることができます。家族が皆よくなれば、民族もよくすることができます」というようなことから、女性の教育を重要視して講演していたことを今でもはっきりと覚えています。さらに、「他民族の言葉と文字をよく学ぶと同時に、自民族の言葉と文字を忘れてはならない。あなたたちは日本語をよく勉強するのは正しいです。しかし、すべてを日本語で話すのは適切ではない。体育の号令をモンゴル語で言ってよい」というようなことを話していたことは私たちにとても深い印象を残しました。当時、徳王は人民の間でとても尊敬されていました。というのは、徳王は高い学問教養を備え、広い知識と洞察をもち、民族の隆盛を憂え、文化教育を深く重要視していたので、多くの支持を得ていました。彼は民族を隆盛させようという希望のために全力を尽くしていたと私は思います。しかし、後に何を選んだのか、私には分かりません。国家と民族にとって、罪のある人になったのを私たちは後に知りました。私のその学校を徳王が設立したということを後に人びとが話していたものです。

—その学校で主に何を学びましたか。モンゴル語で学びましたか。日本語で学びましたか。

日本語の授業は日本人の先生です。その他の授業はモンゴル語でした。学問のあるたくさんの方がいました。彼らの慈しみ深く、高い関心と惜しみない指導によって女子クラスで学んだ4年は大きな意義をもって過ぎていきました。当時、私たちは4年の間に、モンゴル語、数学、日本語、歴史、地理、保健、手芸など多く科目を学びました。そこで、学問だけでなく、数えきれないくらいたくさんの方の道理を学びました。初歩的な国と民族の歴史を理解しました。生活に関して正しい認識を持つようになり、自分自身に自信と希望を持つようになりました。女性でも男性たちと同じ社会的地位をもち、国と民族に功績を立てることができるということを私はそこで学びました。そのような認識は私たちの後の生活にきわめて重要な作用をもたらしました。

—その学校を卒業する時、仕事を割り当てましたか。あなたは卒業してからどのような仕事をしましたか。

私たちがちょうど卒業する直前でした。1945年9月にそろそろ卒業という時に、日本が負けました。そのため、時代が変わって、戦争¹⁰になったので、私たちは卒業証書をもらうことができず、学校は休みになり、私たちは各自家に戻りました。時代がどのようでも、4年間の学生生活は素晴らしく、多くを学びました。しかし、異常な時代に出会ってしまったので、卒業してすぐ仕事は分け与えられませんでした。田舎の家に帰った後、女性にどこからそんな簡単に機会が与えられるでしょう

¹⁰ 1946年~1949年、日本降伏から国民党敗退による中華人民共和国成立までの国内革命戦争のこと。中国では解放戦争、第3次国内革命戦争という（愛知大学中日大辞典編集部編 2010：393, 870）。

か。しかし、後に、共産党のおかげで、革命の仕事に少し参加した後、正式な仕事を分け与えられました。革命の仕事というのは、1945年冬に張家口に内モンゴル自治運動連合会が設立されました。1946年春の終わりに、私の故郷に、盟、旗、村、ガチャ政府が設立されました。当時、ガチャ政府を「アルバ¹¹」と言いました。各レベルに民主政府が新しく設立され、宣伝にかかる人材が必要となりました。当時、牧畜民の中に、文字が分かる人が少なかったので、私たちのように学校にいた学生たちはとても役に立つようになりました。当時、私たちは宣伝資料を皆に読ませるか、写して広める仕事を手伝っていました。共産党、八路軍と内モンゴル自治運動についての文書を私たちは牧畜民たちに届け、広く宣伝しました。そうして、私たちはまた革命の道理を理解し、中国革命と自治運動について初歩的な理解を得るようになり、気持ちが喜び勇んで、すぐでも革命の仕事に参加したいという希望が高くなりました。

そうして、1948年にシュローン・フフ旗のジャガスティ村の幹部育成訓練班で4カ月学びました。その年9月に盟から分け与えられた仕事につきました。当時、盟の中心はシュローン・ツァガーン旗ツァガーン・オーラ寺院にありました。

仕事に就いたばかりの状況を考えると、懐かしく、ついこの間のことのように思い出します。雨にも恵まれた美しい夏のある天気の良い日に、牛車に乗って、仕事場に行くためにジャガスティに向かった日のことがつい先ほどのことのように目に浮かびます。今思うと、1942年に初めて学校に行くために故郷を離れる時も私はまた牛車に乗り、父に見送られました。思うに、生活と事業は生涯牛車を切り離せず、牛車を追って、正義のための事業の道を開き、ゆっくり進んできた歴史でしたよ。人民のことわざに「正直に行けば、牛車で兎に追いつく¹²」というように、事業の道を進めてきたので、私の事業と生活は順調にだんだんよくなり、今日の幸せを享受しています。

故郷を出て、革命の仕事に就いた後は、仕事の求めと生活、縁によって、多くの場所に行き、生まれ故郷から離れて生活して今日に至っています。この間、故郷に何度か帰り、近親や知人と会って懐かしく語り合ったことは私の心にしっかりと刻まれて、永遠の思い出となって残っています。

人の一生を考えると、瞬く間に過ぎ去ってしまうものです。たくさんの希望を実現できないまま、ほどなく過ぎてしまいました。私は張北青年学校の女子クラスにいる時、日本留学を希望していました。もうすぐ行けるというところでしたが、できずに過ぎてしまいました。後に、大学に行き、知識を高めたいと思っていました。またできずに「思いはあっても、馬はない¹³」。美しく若い年月は過ぎてしまいました。

¹¹ 10の意。

¹² 「人は正直に歩んで行けば、いつかは必ず目的に達することができる」、「目的に達するには、結局、正直であることが一番大切だ」という意（塩谷・プレブジャブ 2006：196）。

¹³ 能力がない、の意。

私たちの世代のんびとが出会い経験した生活は複雑だったけれども、意義あるものでした。旧と新の二つの社会にまたがり、新しい社会に幸運にも入り、党と人民、国と民族のために熱意をもって一心に努力しようと力を注いできました。しかし、あとからあとからやって来たさまざまな政治政策を経験し、今、人生の秋を迎え、80も過ぎて太陽が西に沈む時になりました。人の運命はこのようですね。

しかし、私たちは人民に間違いを犯しておらず、子孫にも問題なく年を取ったことはいはれしいです。学校で一緒だった生徒たち—ロールマジド、ナムジルマー、サランゲレル、オコンビリグ、デリゲルジャヤー、シュルンツェツェグ、バルジドマー、ロギル、ラムスルン、ゲゲーンブー、マンダルワー、ゴイゴルマー、デムチダグマー・・・たちと、仕事で一緒だった同郷の人、同郷ではないけれどもそれぞれ分かりあえた先輩、友人たちが幸せな晩年を過ごしているのを想うと、特に心残りはありません。彼女たちはそれぞれ生涯奮励努力し、全力を尽くし、国と民族の事業に努力し、希望を実現しようと苦勞したけれども、その希望を実現させ、希望と目的を達成することができた人たちです。私はこのように素晴らしい人たちとめぐり合い、友人となって生涯を終える幸運をうれしく、満身に、誇りに思っています。

学問を追いかけた4年間はこのようなでした。この4年は私の一生の生活と事業にそのような作用と影響をもたらし、私の生涯の生活の道に良い影響を与え、さらに、忘れられない素晴らしい思い出を残し、私だけでなく、私の友人同僚、子どもたちにも少しは影響を与えていることは間違いありませんよ。

—家族のことについて話していただけますか。

私は1950年に結婚しました。当時おそらく22歳だったでしょう。私の夫はブフと言ひ、辰年で、オールドスのジュンガルの人でした。1928年生まれです。当時、ブフはシュルーン・フフ旗の旗長でした。包頭のモンゴル学校で、モンゴル語で勉強していたそうです。モンゴル語が上手です。オールドスのジュンガル人はモンゴル語を話しません。漢語です。しかし、私の夫はモンゴル語の読み書きが上手でした。早い時期に革命の仕事に就いた人です。私は当時学校の教師でした。親戚の兄が私たち2人を引き合わせました。私たちには3人の子どもがいます。一番上がオドンという娘で、辰年で、軍隊に入っていました。2番目はオチで、よく知っているでしょう。巳年です。一番下は息子で、オレンチと言ひ、酉年です。3人の子どもの中で、オチが父と似ています。しかし、性格は私に似ています。やさしく、思いやりのある性格です。いつも他の人のために心を痛めて、人の役に立とうとする人です。彼女はどんなに忙しくても毎週来て、食事をはじめ、あらゆる生活の世話をすることを忘れません。オチが聡明なのは父に似ました。父（ダリマさんの夫）は大変聡明な人でした。記憶力がよく、話し上手で、博識で、弁舌が巧みな人でした。しかし、父のいろいろなものに興味を持つ性格

は息子のオレンチが似ました。オドンは両親それぞれに半分ずつ似ていると言ってよいでしょう。オチは父に似ています。「オレンチは母（ダリマさん）に似ている」と父（ダリマの父）がよく話していました。オチは幼い時から父に似て、大胆かつ知的で、聡明でした。姉は妹より恥ずかしがり屋でした。オチは幼くして学校に入りましたよ。姉が学校に行く時、オチはわずか5歳でしたが、姉についていき、隣に座ります。先生が姉に質問をすると、姉が答える間もなく、妹のオチが立って、答えていたそうです。幼い時から、そのように大胆かつ知的な子どもでした。それで、後に、先生がかわいいと思ったのかどうか、妹も学校に入れました。姉と妹の2人が学校に通った面白い歴史はこのようです。

後に、夫の仕事が変わり、バヤンノール盟の副盟長として行く時、私たち家族皆で移り、私はアラシャー¹⁴で教師をしました。そうしているうちに文化大革命が始まりました。

1963年に私たちをバヤンノールからフフホトに連れてきました。文化大革命が始まるとすぐ、夫のフフに民族分裂、国家謀反などのレッテルが貼られました。そして、捕まえられ、監禁されました。私をバヤンノールから連れてきて、2、3年何もしないで過ごさせ、政府宣伝部の四清¹⁵事務局に連れてこさせ、ある雑誌の編集者にさせ、臨時で仕事をさせられていました。反動分子の家族ですから、重要な会議には参加させません。給料が20パーセント削減されていました。私とその宣伝部にいる時に、人が私を吊るしあげる時に、同じ組織の仲間たちが私を守って、吊し上げに行かせませんでした。反動組織の家族として夜中に家探しをする際も一緒に仕事をする友人仲間たちが私に事前に知らせてくれます。家探しというのがありますよ。「慌てないで」と同僚たちが私をかわいそうに思って事前に教えてくれます。私は体が弱かったので、一緒に仕事をする仲間たち皆が私を守ってくれました。良い心を持った人たちでした。

文化大革命以来、心から心配し、泣きはらし、不眠症になりました。1967年から1970年まで唐山に行き、3年いました。そこにいる時、家族子どもたちと手紙も交換させません。子どもたちとすら連絡できません。唐山にいるのは皆大きな罪を持つ人ではありません。良い人も行かせません。私のように、2つの間にいる人を行かせて、思想を改めます。改造します。当時、私の父が子どもたちを見ていました。私の夫のフフは捕まっています、私は唐山で、家には主がいません。私の父がいなかったら、子どもたちはどうなっていたでしょう。父には本当に恩があります。私を育て、そのうえ、孫たちも助けて育て、教育してくれました。私は1970年に帰ってきました。その際に、それら多くの幹部に再び仕事を割り当てました。一番良いのは盟レベルで、旗県、ソムというように、レベルごと

¹⁴ 1956年にバヤンノール盟が成立。バヤンノール盟が当時管轄していたのはアラシャー（阿拉善）旗、エジナー（額濟納）旗、巴彥浩特市と磴口県である（巴彥淖爾盟誌編纂委員会 1997：138-139）。

¹⁵ 1962年から66年にかけて展開された社会主義教育運動。文革前、1963年からは、帳簿・財政・在庫・労働点数の点検をいい、1965年からは政治・思想・組織・経済を点検すること（愛知大学中日大辞典編纂所編 2010：1615）。

に割り当て、残った私たちを五七幹校¹⁶に行かせますと、五原県¹⁷に送り、ブタ、ウシ、小家畜を放牧させました。その際、私はヒツジとヤギを放牧していました。五原県にいる間に一度、家に帰ることができました。

数年後にそこから私を連れてきて、新聞社で仕事をさせる、と割り当てましたが、行かせませんでした。貧農・下層中農協会の通訳となりました。私は

「できません。」

と言いましたが、

「だめです、必ず行きなさい。」

と行かせました。そこで仕事をしていましたが、病気のために退職しました。おそらく 1983 年に退職しました。当時、幹部は少なかったので、党、組織からどこに、どんな仕事を割り当てられても、何の条件も言わずに行って仕事をしていたため、私でさえかなり多くのところでさまざまな仕事をしていました。青年工作¹⁸、中華全国婦女連合会、保健、教師、教育、雑誌の編集、通訳などの仕事をしてきました。行った場所ではどこでも私は良い心を持った、いい人たちと知り合い、助けを得てきたのをうれしく思い、いまだに交流があります。私の夫ブフは仕事に復帰すると、内モンゴル師範大学の学長として行くことになりました。後に、畜牧局長として仕事をし、1988 年に退職しました。離休¹⁹です。そうして、2013 年に病死しました。85 歳でした。

私には生涯日本に行くという大きな希望がありました。大学に行くというもう 1 つの希望がありました。しかし、日本に留学できませんでした。しかし後に、旅行で行きました。日本は美しかったです。また、29 歳の時に、内モンゴル大学に合格しました。しかし、病気になったため、学ぶことができませんでした。当時、息子のオレンチは 1 歳でした。ノイローゼになり、不眠症でした。体調がととも悪かったです。しかし、私は健康になろうととても努力していました。心配事があれば、気持ちを静めます。毛主席の著書を夜中に読みます。眠れなければ、本を読みます。私自身幼い時に母を亡くし、母がいない苦しみを味わってきたので、「3 人の子どもたちには決して同じ境遇にしないようにしよう」と思っていたものでした。子どもたちのために生きようと気持ちを静め、健康でいようと努力してきました。

—お姉さんはまだ存命ですか。おじ、おば、親戚はたくさんいらっしゃいますか。

¹⁶ 文化大革命期に設立された幹部訓練学校（愛知大学中日大辞典編纂所編 2010：1783）。

¹⁷ 内モンゴル自治区バヤンノール盟（現バヤンノール市）に位置する。

¹⁸ 中国共産主義青年団の仕事の意。中国共産主義青年団とは中国共産党の指導下にある先進的の青年の組織（愛知大学中日大辞典編纂所編 2010：2164）。

¹⁹ 解放前からの幹部が老齢のために退職すること（愛知大学中日大辞典編纂所編 2010：1037）。退職金や年金などで、「退職（退休）」と比較して優遇措置がとられている。

姉はいません。亡くなりました。姉の名はセリマーと言います。はじめは、モンゴル服を縫い、飾り制作をしていました。後に、助産師について勉強し、就職しました。助産師、看護師、看護師長になり、一步一步上にあがり、医師になりました。多くの人を治療しました。旗の病院で仕事をしました。姉には4人の子どもがいました。ソブド、ソイルト、ソイラーという名前です。

他の親戚で幼い時にともお世話になり懐かしいのがオムバおばあさんという父の大叔母です。オムバは父を幼い時に引き取って育てたので、自分の実子と変わりなく愛し育てたそうです。そのため、実の両親が亡くなった後は、父は困ったときはオムバを頼りますし、オムバも父をいろいろ手伝ってくれたそうです。そのため、妻が病気になり、幼い子どもを抱えて大変なときに、父は仕方なくオムバを頼って移っていきました。

当時、オムバの家も貧しく大変でした。オムバには娘が1人いましたが、その娘はかなり年を取った上に重い病にかかっていた。娘の夫も年を取っていて、酔っ払いでした。男の子1人と女の子2人の計3人の孫がいました。当時、孫息子は10代で、孫娘は6歳と2歳でした。孫たちがまだ小さかったので、家のさまざまな仕事はおそらく皆オムバ1人にのしかかっていた。そのうえ、私たち一家のことも手伝うだけでなく、近所の知人たち、親戚も助け、天幕家屋の屋根掛けのフェルトを縫い、家の綱を繕うなどどんなに大変な仕事も、他の人ができないような仕事もしてあげて手伝っていました。今思うに、そのオムバおばあさんは能力があって賢いだけでなく、やさしく慈悲深い功労者でした。

母が亡くなって数日もたたないうちに、父は姉と私の2人を連れて、父方の伯母の家に移りました。その伯母は父の姉で、メンドツェツェグという名前でした。そこに行った訳は、1つに、オムバにさらに迷惑をかけ、苦勞させることになるので、迷惑をできるだけかけないように考えたのでしょう。2つ目は、姉と私たち2人が母を探して悲しい思いをできるだけ軽くするために、別の家に移ったのでしょう。しかし、伯母の家に行つて数日後、私が用を足しに外に出た際に、縛つてあつた犬が鎖を切つて、家の主人がその犬を捕まえる前に突然私の両足を噛み、重症となりました。右足の膝の後ろ側と左足のももをそれぞれ牙で深く噛まれたので、大量に出血し、止まらなかったそうです。父は驚いて、牛の糞の熱い灰²⁰を付けてようやく血が止まったそうです。当時、他に治療法もなかったので、けがはだんだん重くなり、膿んで膿が出て、半年あまり、立ち上がることはできませんでした。後に、古い銃のかすを塗つてようやく治つたそうです。私にも幼い時からいろいろな苦勞が重なり、私が泣いて一人きりの父と親戚の人たちをどれだけ困らせたか、分かりません。今に至るまで、足にはケガの跡が残っています。

²⁰ モンゴルでは一般に燃料はアルガルと呼ばれる乾燥した牛の糞である。

伯母の家も中産階級の下くらいの生活でした。3人の成長した息子と1人の娘がいました。娘は私の姉より1つ年上でした。寅年です。兄嫁たちもいます。次男は嫁を迎えていました。彼ら家族に私たち家族3人を加えるとみんなで10人くらいになります。そのため、彼らのところに長く暮らすとそれもまた家計を圧迫することになると考え、冬になるとまたオムバのところに移り、ボルガス²¹で作った家畜を入れるようなブグと呼ばれる彼らの簡単な家屋に暮らしました。父と私たち3人はオムバと別々に暮らしたこともありました。翌年、私たちはトールツォグ（現在のジャンディーンゴル村内にある）に行き、バラ・アープ（おじさんの意）の家屋の東の部屋²²に私たち3人が暮らしてオムバとは別々に生活しました。バラ・アープは父の良い友人でした。私の父はバラ・アープの2人の息子、メンドバヤルという家の2人の息子など、4、5人の男の子たちにモンゴル語を教え、満州語とモンゴル語を比較対照して書かれた『仏教経を深める書』という本を教えていました。この本は当時必修の教材でした。私が覚えているところでは父は特別に厳しい教師でした。教えた内容を必ず暗記させ、暗唱させます。もし、暗記、暗唱できない生徒がいれば、赤い木のムチで手のひらが赤くなるまでたたきます。そのことは苦く思い出されます。私も彼らのそばに座り、父からモンゴル語を学びました。しかし、私は女の子で、父の真の学生ではなかったもので、赤い木のムチを味わっておらず、幸運でした。父の学生たちの中で、バラおじさんの息子であるダシツェレンと、メンドバヤルおじさんの息子であるポンソグラシの2人はいつも流暢に読み、きれいに書くことができていたので、父は彼らを気に入ってかわいがっていました。後に、彼らが成人になったあと、いつも父を「先生」と尊敬を持ってみていたので、親しみを持って語りあいに来てくれていました。後に、彼らはチャハル盟張北青年学校を卒業し、若い時から国家民族解放、経済建設、教育の各領域において皆基幹勢力となり、自身のすべてを貢献しました。ポンソグラシは解放戦争時、戦場で亡くなりました。ダシツェレンはシュローン・フフ旗長をして、90年代に病死しました。彼らは皆チャハルの教育部門の著名人です。ダシツェレンの父母はとても穏健でやさしい人たちでした。姉と私たち2人は彼らを「バラ・アープ」、「バラ・モーム（お婆さんの意）」と呼んでいました。父が何か用事で外出したとき、バラお婆さんは私たちに気をかけて食事を手伝ってくれたり、家に呼んでご飯をごちそうしてくれたこともありました。

子どもは犬とどんな違いがありますか。ご飯を食べさせ、よくかまってくれる人たちに対して、簡単になつくものです。姉と私たち2人はバラ・アープとモームの2人に大変なついていました。バラ・アープがあるときドロンノールに行ってきて、乾燥した美味しい揚げ菓子（ビスケット）を買ってきて、自分の子どもたちと姉と私たち2人にそれぞれ同じように分けてくれたことがあります。その揚げ菓子は言葉にすることができないくらい美味しかったです。そんなに美味しい揚げ菓子をそれまで

²¹ ヤナギ科。学名は *Salix* L. 同定は温都蘇編（1992：65）による。

²² 家屋には3部屋あり、名称は東の部屋、西の部屋、中央の部屋。

食べてみたことはありませんでした。初めて食べたので、今でもその揚げ菓子の味を思い出すとよだれが出ます。このように姉と私たち2人はバラおじさんとおばさん自身の2人の子どもと同じようについてまわり、なついていました。彼らの家に何回泊ったのか、思い出せないくらいです。後に姉と私たち2人が会って当時のことを話すと自然にバラ・アープとモームのことになります。しかし、いろいろな原因により、彼ら2人が生きているうちに再会できなかったのは残念です。

—母方の親戚はいましたか。

母には実兄が1人いました。ラマでした。私のそのラマの伯父、トムンゲレルはマロルト寺院のラマでした。「母が亡くなり母無しになった2人の幼い姪を伯父は心から心配していた」と父は私たちにいつも話していたものでした。私が覚えている限りでは、伯父は中背で、背筋がまっすぐで、黒い髭をたくわえ、穏やかで明るい、50代の人でした。穏やかで良い性格で、私たち皆尊敬していました。伯父は美しい白いフェルトの覆いがある牛車を持っていました。出かける時はいつもその牛車に乗って出かけていたのを私たちは見ていました。私たちを見に来たときはいつも泣いて、私たち2人を抱きしめてキスをしてかわいがっていました。なぜこのようだったのか、当時理解していませんでした。当時、伯父はたった1人の妹を恋しく思っていたのと、幼い2人の娘たちに同情し、かわいそうに思い、父をできるだけ手伝って私たち2人を見守っていました。

民国時代の旗長は皆自分の王府に生活し、行政の仕事をしていました。旗長の王府には4人の書記がいました。彼らは月ごとに1人ずつ交代で勤務し、仕事をしていました。父はその4人の書記の1人でした。父が勤務の際には、姉と私たち2人を伯父が寺院に連れていき、住まわせます。ラマの伯父は清潔でとても厳しい人でした。本来、寺院に娘子どもを住まわせてはなりません、私たち2人が幼かったので関係ないと住まわせていたのでしょう。しかし、伯父は私たち2人にとっても厳しかったです。勝手に外で遊ばせません。私たち2人に経を教え、読ませていました。ラマの伯父は私たち2人をとっても愛していました。最も良い食事を作って食べさせます。人に頼んで縫ってもらった服を着せます。当時、幼い小ラマたちがチャムを踊るのを習うのをときどき見せてくれます。私はそれを見て、ある動作を覚えて来て、ラマの伯父に踊って見せると、とても怒って

「お前は見てよい。だが、真似して踊ってはいけない。」

と厳しく教えました。当時、娘こどもが伯父の寺院に暮らすのは大変だと思っていたけれども、後に思うに、伯父が厳しくしつけてくれたことは私たちにとても役に立ちました。さまざまな大事な習慣を身に着けました。私のこのきれい好きの性格もラマの伯父の影響でしょう。

父は年に3回勤務に行きます。父が勤務に行くときはだいたいいつも私たち2人を寺院にいるラマの伯父のところに入れていました。ラマの伯父はとても学識のある人でした。伯父は普通のラマからロボン（経師）になり、それより上のラマになり、さらに大ラマになり、寺院のハンボ（責任者）に

なりました。ラマの伯父が昇進するたびに寺院で大きなお祝いの会をします。そのお祝いの日に父が来て、炒め物、ご飯を作るのを手伝います。父は料理が上手でした。ラマの伯父は草原に家を1つ持っていました。そこに私たち2人をときどき連れていくこともありましたが、ラマなので、通常は寺院に暮らします。その家を1人の親戚の妹が管理していました。家畜もいました。その妹はその家を管理して家畜の乳を搾り、ラマの伯父のお茶のミルクと伯父が食べる乳製品を用意していました。その妹にはまたたくさんの子どもがいたので、ラマの伯父の家と家畜を管理して生活していました。

私が幼い時の印象深い思い出の1つにユールン・ジャンギという家族があります。ユールン・ジャンギという人は母方の祖母の兄弟の息子です。祖母の実弟の息子です。この家族はかなり裕福で知識人の役人の家でした。そこには20、30頭のウシ、200頭余のヒツジとヤギ、30、40頭のウマがいました。すごく裕福ではないとはいえ、私たちが思うにとっても豊かで、学識高い素晴らしい家族でした。ユールン・ジャンギはとてもいい人でした。良い性格の人でした。私たちをよく世話してくれました。私たちが一度メンドツェツェグの家のそばに来た時に、ユールン・ジャンギの家族もそばにいました。私たちには家畜囲いもなく、干草もありませんでした。そのため、ユールン・ジャンギ家は私たちに荷車10台分の干草を、お金を取らずにくれたことをいつも忘れません。私たちも家畜の仕事を少し手伝い、お互いに助け合っていました。ユールン・ジャンギ家は私たちを助けてくれただけでなく、他の貧しい人たちも大いに助けていました。

印象深く覚えている人の1人にユールン・ジャンギの後妻のバドマツェツェグがいます。ユールン・ジャンギの先妻が亡くなり、後に若い妻を娶りました。つまり、バドマツェツェグです。バドマツェツェグはとても良い性格で、気持ちのいい人で、特別に慈悲深い、いい人でした。ユールン・ジャンギの先妻には4人の子どもがいました。後にバドマツェツェグに4人の子どもができました。バドマツェツェグは8人の子どもを同じように育てあげました。ユールン・ジャンギの2人のおじの面倒も見て、亡くなるまで世話をしました。

ユールン・ジャンギの2人のおじも彼らと一緒にいました。ゲルのそばにあるもう1つの天幕家屋に住んでいました。そのおじの家にはいっぱいの本がしまっており、本の中に座り、毎日、本を読んでいます。彼はラマではなく、平民でした。そんなに年が大きいにもかかわらず、毎日、本を読みます。ユールン・ジャンギの家の人はそのおじたちにご飯を作って世話をし、亡くなるまでそのようにちゃんと世話をしていました。そのおじが亡くなる際に、書物の中でお祈りして座ったまま亡くなったそうです。そのたくさん本がどうなったのかと私はいつも考えていました。現在、軍隊作家のステンベリクはユールン・ジャンギの妹の息子で、孫にあたります。そのため、私は一度ステンベリクに「あのおじの本をどうしたのですか。」

と尋ねると、

「文化大革命の時に燃やされました。」

と言いました。スチンベリグの母はユールン・ジャンギとバドマツェツェグの2人の娘の1人です。今お話ししたたくさんの本を持つおじとは別にもう1人ラマのおじがいました。そのラマのおじもバドマツェツェグはよく世話をし、亡くなるまで、面倒を見ました。バドマツェツェグは私たち2人もとてもよく世話をしてくれました。姉が結婚する際も新しい服を縫ってくれました。私の祖母の子どもの世話をよくし、祖母が亡くなってからは家に連れて来て住ませ、結婚させて、独立させました。バドマツェツェグは若かったです。おそらく、ユールン・ジャンギの先妻の長女より10歳ほど年上だったでしょう。年齢は若かったです、気持ちがよく、心が温かい、とてもいい人でした。

私が知っている限り、当時の人びとは皆そんなに裕福ではありませんでしたが、お互いに良い関係を築き、親しく、仲が良かったです。どこかの家で何か苦しいことにあったなら、何の条件もなくお互いに助け合います。親戚はもちろんのこと、親戚でなくても、困っていたら、必ず助けます。孤児で貧しいと同情して助けます。人間関係はこのように単純で、自然で、親切心と誠実だったのは明らかです。

聞き取り日時：2014年11月10日、2015年7月14日-16日、2018年11月

聞き手：サラングレル

場所：中国内モンゴル自治区フフホト市自宅

追記

ダリマさんのモンゴル語による手記が張北青年学校の卒業生による『回想録』に掲載されている (Darima 2007)。このダリマさんの手記原文と日本語訳が日本にて出版公開されている (シ・ダリマ 土田訳 2017)。シ・ダリマ (2017) には張北青年学校の思い出だけでなく、第2章「思い出の断片」として母のこと、トゥムデルゲル伯父、ユンロン伯父 (ユールン・ジャンギ)、父についての思い出が掲載されている。この第2章はサラングレルが聞き取りして書き起こしたものにダリマさん自身が加筆修正したものである。シ・ダリマ (2017) には本稿ではほとんど触れられていない張北青年学校の教員たちと故郷について、姉セリマーについて別の方が寄稿した文章 (日本語未訳) がある。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 17K03274 の助成を受けました。ダリマさんに心よりお礼を申し上げます。また、ダリマさんの回想録の寄贈してくださった土田博子さんに感謝の意を表します。

引用文献

愛知大学中日大辞典編纂所編 (2010) 『中日大辞典』第三版 大修館書店

巴彥淖爾盟誌編纂委員會（1997）『巴彥淖爾盟誌』（上）内蒙古人民出版社

Darima（2007）「Soyol-un mör qaiqsan minu dörban jil」 Sili-yin yol aimaq-un ulus tör-yin jöblelgen-u soyol teüqe-yin komus nairayulba 『*čaqaqar čiyulyan-u erdemsoyoltu monyol dumdadu suryayuli -yin teüqen materiial*』 133-151 頁（dotoγadu materiial）。（ダリマ「学問を探し求めた私の4年間」 シリングオル盟政協文史委員会編『チャハル盟エルデム・ソヨルトモンゴル中等教育学校歴史資料』（内部資料））

ダリマー 土田博子訳（2013）「張北青年学校での4年間」『日本とモンゴル』48-1：91-100

内蒙古植物誌編輯委員會（1994）『内蒙古植物誌』（第2版）第5巻 内蒙古人民出版社

温都蘇編（1992）『蒙俄坵漢植物名称』内蒙古人民出版社

塩谷茂樹、E.プレブジャブ（2006）『モンゴル語ことわざ用法辞典』大学書林

シ・ダリマ 土田博子訳（2017）「内モンゴルに生きて」濤標（私家版）

森久男訳（1994）『徳王自伝 ドムチョクドンロブ』岩波書店

米倉浩司・梶田忠（2003-）「BG Plants 和名-学名インデックス」（YList），<http://ylist.info>

（さらんげれる・中央民族大学蒙語系／こだま かなこ・千葉大学人文科学研究院）

An oral history of urban Mongolian woman in China (1) Ms. Darima

Sarengerile and Kanako KODAMA

Summary:

This oral history was provided by Ms. Darima (b. 1929) in November 2014 and July 2015. She was born in Shuluun Huh (Zhenglan) banner, Silingool aimag, Inner Mongolia, China. She now lives in Hohhot, the capital of Inner Mongolia. She describes her life as a student at the Zhangbei (Chakhar) Youth School in vivid detail. She had two dreams: to study in Japan, and to go to college. Those dreams never came true. This oral history teaches us about her life and her family before and after the establishment of the People's Republic of China.